

幕末期宇和島藩の動向(6)

——伊達宗城を中心に——

三 好 昌 文

前号(第11巻 第4号)

2 嘉永6年ペリー来航～万延元年3月桜田門外の変

A) ペリー来航～日米和親条約の締結

カ) 安政2・3年における攘夷派大名

キ) 薩摩藩士田原直助らとの交流

ク) 在府中の伊達宗城

ケ) 宇和島藩の蒸気船建造

B) ハリスの来航と日米修好通商条約の締結

ア) ハリスの来航と攘夷派

本号

イ) 田原直助の再来藩

ウ) 日米修好通商条約調印と伊達宗城

エ) 一橋派としての伊達宗城

オ) 宗城の思想の変化

カ) 将軍継嗣問題と条約調印

イ) 田原直助の再来藩

安政3年、宇和島藩領御荘組の外海浦深浦港で、薩摩藩の軍艦修復のため、薩摩藩士田原直助が来藩したことは先述した。翌4年(1857)12月朔日、直助の来藩が伝えられている。その事情は未詳だが、宗城の意志が働いていたことは間違いあるまい。江戸からの帰途のことで、正式の招聘といってよい。

直助の旅宿は豪商増原七右衛門宅で、旧知の藩士渡辺作之進が前年に続いて軍艦修行したいと出願している¹⁾。12月8日、藩士桧垣弥三郎が近く招致する直助の処遇について、簡条書を藩に提出し指示を仰いでいる。藩は直助の来藩の

目的は「専砲術並物産御用」にあるとし、弥三郎は11カ条の質疑をしている²⁾。そのなかで、直助が到着すれば小姓頭(桜田主水)が直接応待するとしていて、宗城と松根図書の内意を承けていることが分かる。直助に就いて砲術・物産学修行の藩士は、渡辺作之進父子のほかに、松田源五左衛門・小波軍平・徳久忠介(以上砲術)、若松総兵衛・春亭・勘定方与力佐輔(物産学)となっている。

安政5年正月17日、藩が威遠流世話方に小銃台木を600挺も製造を命じていることで分かるように、宗城は銃砲製造に尽力している³⁾。これはゲペール銃であろう。

田原直助は、正月28日来宇した⁴⁾。小姓頭桜田主水が2月朔日に旅宿へ行き、「砲術及物産伝習」として、田原七左衛門・松田源五左衛門・小波軍平・加幡又市・中島田宮・徳久忠助・若松総兵衛・川口春亭・勘定方与力佐輔・渡辺作之進父子を従学させるとして、「腹臈ナク伝授ヲ受度ト御命(○宗城の命令)」を伝えた。14日、直助は弥三郎に伴われて宗城に謁見した。さらに直助は不易流砲術・樺崎砲台の試撃を見学している。同月22日、桧垣・木原半兵衛・大谷十次郎を随行して村落を巡回、29日から8月にかけて巡回、ほぼ全藩領に及んだと考えられる。こうして、直助は「宇藩物産考」を著わすのである。こうして宗城は島津斉彬の開化政策を受容するに至ったことが明らかになる。宇和島藩と鹿児島藩の密接な人材交流も幕末・維新にかけて継続する。

直助の宇和島滞留中、藩士岡村源次兵衛の子元之助が、直助の帰国に随行して鹿児島に行き、物産学の講究を出願し、7月2日、小波軍平に鹿児島で砲術器械の製造・諸金鋳見分ならびに精錬・陶器製造・藍玉製造の伝習、大谷藤右衛門弟十次郎および岡村元之助に物産学講習が命ぜられた。直助は9月22日、「滞在中嶮難ヲ踏ミ、物産ヲ探リ、物産書ヲ著シ、之ヲ呈スルヲ謝シ、公(○宗城)之御満足ノ意ヲ伝へ、白銀五十枚、仙台平袴地二、槻角桧厚幅板各一ヲ賜フ」と宗城から褒賞され、同月25日宇和島を出発した。実際には大谷と岡村の2人のみが鹿児島に出かけたが、肥後国水俣で田原の転勤(薩摩藩軍賦頭取)の報に接し、空しく帰国した。宗城は斉彬の集成館建設に代表される西洋の科

学知識・技術を導入しての殖産興業・富国強兵策を模倣しようとした訳であるが、この構想は頓挫するに至った。安政5年7月、斉彬は逝去したが、宗城は国父島津久光ら薩摩藩公武合体派との交流を継続した。

ウ) 日米修好通商条約調印と伊達宗城

安政4年10月21日、ハリスは將軍家定に大統領親書を呈し、ついで老中堀田正睦に通商の必須を説いた。12月11日、幕府全権井上清直らはハリスと日米修好通商条約交渉を開始し、翌5年正月12日交渉はいったん妥結した。ハリスはとくにイギリスの侵略主義を強調し、対照的にアメリカの平和主義を説いて、ヨーロッパ諸国の侵略阻止と幕府の富国強兵策の成功を説いて、堀田以下の幕府主脳の説得に成功したのである。

幕府は4年11月、御三家・溜間詰・大廊下詰の諸侯に、ついで大広間詰等の諸侯に堀田とハリスの対話書を示して意見を諮問していた。諸大名の意見は条約承認論が過半であったが、拒否論も根強く、とくに徳川斉昭は交易は侵略に通ずると頑強であった。幕閣はこの反論を、ハリスの威嚇によって無視するのである⁵⁾。

通商条約の中核は、周知の通り自由貿易条項にあり、武器類も幕府管理下に大名・旗本らへの購入が認められた。これによって、諸大名は自力建艦・武器製造を放棄して、欧米からの買船・武器購入が可能となり、それは諸藩の経済力に相応することになる。開港場は神奈川（横浜）・長崎・函館の3港であり、諸藩の港湾への自由入港の規定はない。

幕府はすでに12月29日、儒官林緯・目付津田正路が京都で武家伝奏広橋光成・東坊城聡長と会見し、世界情勢からの開国論を説いた。翌5年2月9日、老中堀田正睦が条約勅許を得るため参内、さらに3月20日にも参内して、条約調印につき御三家・諸大名の意見を求め、改めて勅裁を求めよとの勅諭を得た。この問題と將軍継嗣問題がからむのであるが、それは後述するとして、4月23日、彦根藩主井伊直弼が突如大老に就任し、6月19日には日米修好通商条約・

貿易章程が調印された（万延元年4月3日、批准書交換）。

この安政4年中頃から約1年間の状況を、宗城らの動向を軸に考察しよう。

安政4年2月25日、宗城の松平慶永宛書翰では、⁶⁾「儲副建識杯ハ実ニ公之方寸方出候而、老中へ被申達候様無之而ハ（○下略）」と、水面下での慶永の一橋慶喜擁立構想を支持している。すでに年長・英明・人望論が出はじめている。それよりも、「廟堂光景無相変、一向万機之密謀近日不聞得」と、幕閣内部の情報が得られないとし、とくに「彼夷御処置一条結末之洞察如何と申処」、幕閣、堀田正睦から明確な回答がないとしている。ハリスの下田駐在について、「勘定奉行も大小御目付も心懸不宜」としてその交迭を主張し、確乎不動の対策を求めている。

同年12月13日、宗城は堀田正睦が諸大名に示した堀田とハリスの対話書（封書2通）に接した。⁷⁾アメリカの通商条約調印の提案は、大統領は「日本政府之為ニ大切と心得」、「御国之儀者他国と違、親友」と考え、領土侵略の考えもない。この50年間に西洋は大きく変化し、蒸気船・電信の発明により、「江戸表より華盛頓迄一時之間に応答出来」、「カリフォルニヤより日本へ十八日ニ而」航海できるようになった。蒸気船による交易は、西洋諸国に富強をもたらし、「西洋各国ニ而者、世界中一族ニ相成候様いたし度心得」、その障害となるものは除去する考えである。そのため「一、其一者使節同様与事務宰相シンストル（ミニストル）一名エージェント（エージェントか）を部下の置附」たく、第二に自由貿易であり、これはアメリカのみならず西洋各国の希望である。ただイギリスは「日本と戦争致し候儀を好而心懸居候」と持ちかけている。英仏は同盟してロシアと交戦し、ロシアは満州・唐国の侵略を構想し、魯英戦争が再起する可能性がある。そのため、英国は蝦夷地を占拠にしようとしている。さらにアヘン戦争以来の清国侵略の事実に触れている。英人は清国同様、日本にもアヘンを持ちこむであろう。その侵略とアヘンの交易を米国は制御できる。日本は泰平に慣れ、戦争に必要な蒸気船などの軍器を持たず、英仏の侵略に対抗できず、敗北後条約を結ぶことになるであろう。米国大統領は米国と通商条約を締結し

ておけば、他国を規制することができる。以上がハリスの幕閣説得の要旨である。アメリカは日本の富国強兵のため、全面的に協力し、軍艦・蒸気船・武器・陸海軍の士官も派遣すると述べている。

安政5年正月12日、前年12月2日、堀田正睦方でのハリスとの応接の情報を入手した⁸⁾。堀田は米国大統領の厚意を謝し、貿易の開始も承認し、ミニストル(公使)の設置には国内事情を考慮して慎重論を述べている。開港場は三港としている。

こうして、通商条約の締結を前提として交渉が開始された。宗城が入手した「12月14日亜墨利加使節差出候書付和解」では、条約文案16カ条が明記され、「日本ニ於テ亜米利加商売ヲ為ス定則」6則(貿易章程案)も提示されている。

以上を閲覧した宗城は、正月13日から堀田への建白文を起草し、翌14日、家老桑折左衛門らの意見を徴し、29日に建白は江戸に届いている。この「佐倉閣老へ御献議案」では⁹⁾「今般御処置之当否者、御国家治乱ノ境候間」と基本的観点を示し、「元来洋夷之事情審ニ伝承不仕、天下之形勢素より弁察不行届」と慎重な姿勢を示して、7条にわたる建白を出している。

(1)前述したようなハリスの国際情勢の理解、条約案文について、「御許容難相成、釀患之条々不少様奉存候得共」と疑念を持ちつつも、現実の事態の推移を考慮して、米国の希望する条件を全部拒否すれば危難を生じ、信義を失うとして、「後来釀患禍源ト可相成ケ条被竭御商議、決而御許容不被為在様、切ニ奉仰希候」と述べている。将来の禍根というのは、条約案文第二条の日本と他国との「物論」を生じた場合、日本より願って米国を仲介人とする件が、「日本之神武落地、(○中略)又属国ニ准候様奉存候」と、日本が米国の保護国化する疑念を持つ。第三条の米国人の居留・貿易のため、大坂・長崎・平戸・京都・江戸・品川の開市・開港について、「後日不側之大患胎含仕居」、断乎拒否すること。第四条の阿片について、その輸入を日露追加条約のように厳重に禁制すること。

(第六条の領事裁判権の問題について、宗城は言及していない)。第七条の米国人に「亜米利加コンシュライル司人ノ證書」を持つ者には国内旅行を許可する

という案に、「末々随意勝手ニ御国中横行可致端緒」となるとして反対する。第八条の在日米人の信教の自由については、日蘭追加条約に準ぜよ。

条約案文の具体的問題についての指摘は以上のとおりである。とくに阿片の害と信教の問題が、「洋夷他州之人民ヲ扇動、迷乱萎弱ニ致し候術ハ、右ノ両件ニ帰着」すると結論づけられている。

宗城は日米修好条約の締結を、欧州15カ国にも波及し、「西洋一般之基礎トモ可申御緊要之儀」と、国際条約の根幹になると認識し、軍艦・蒸気船・軍器の輸入については、積極的に賛成している。しかし、その心底には外国との和親、通商が「実戦之覚悟」に油断を生じさせるとの心配がある。「神祖神武御実戦ニ御復古被為在、非常之御英断ヲ以、迅速当今被対蛮夷候着実利用之活法、兵制御革正相成」と攘夷論の維持をみせている。幕府は必戦の覚悟で、諸大名にそれを厳命せよと主張する。つまり通商は便法に過ぎない。

(2)ハリスの日本は数百年戦争がなく、そのため軍備・訓練が不備であるという指摘を、「是又実地之至論」とし、「内地武備之弛張ノ如右」と洞察されている。もし、エージェントの在府を容認すれば、国内情報はワシントンへ、さらに欧州15カ国に伝達され、大変な事態を迎える。

(3)米国は同盟はしても干戈は用いないというが、実は独立戦争・メキシコ戦争をして武力を充実させ、清国砲台の誤射に対しても反撃して砲台を破壊している。つまり、「如此実戦之覚悟、片時も不忘」という事実があると指摘する。和親・通商条約の維持には軍備の充実が必要とする。

(4)自由貿易は幕府はもちろん諸大名にも免許し、日本の軍艦が洋外に乗り出せるようにせよ。

(5)蝦夷地はかねて主張しているように重鎮枢要の場所である。魯英に併呑されないよう厳密に守備すること。

(6)貿易が盛行すれば、幕府・商人に利潤が入るようでは不公平である。諸大名の守衛強化のためにも、大名領国の諸産物を売却できるよう貿易を拡大して欲しい。諸大名の疲弊は国力の衰弱になる。

(7)諸大名の西洋武器類その他必需品の購入を許容せよ。

堀田正睦は、安政5年正月9日、この建白書を修削・正訓して藩の江戸留守居役に渡し、25日に宇和島に届いている。この「御留守居ヲ召シ渡サレシ書」では諸大名への諮問と条約勅許問題に触れ、建白書は文意などをさらに加除するとしている。¹⁰⁾『昨夢紀事』には「水戸老公献議」および「越前侯献議」を所収する。前者の斉昭が米国へ派遣され、江戸への商館等建設を表明したい等としていることは有名である。「夷狄ヲ防禦」のため、大艦大砲製造のため、百万両の下賜を願っている。後者では、慶永は持論の富国強兵を強調し、「右ニ付貿易ヲ繁盛ニ被行候儀、最肝要ニ御座候得ハ」、三港に止まらず、積極的な開港を構想している。しかし、京都開市は反対、江戸は公使館の開設のみ許容し、貿易は品川のみとする。神奈川の開港も、戦端を開いた場合に防禦不能として反対する。外国人の日本国内旅行は、「貿易取扱候『プロマチーキアケント』竝重立候役人之儀ハ、和蘭加比丹之律に基キ御免許可然候事」とするが、治安を考え当面は拒否する。自由貿易は奸商の射利を防ぐため、当分は「官府（○奉行所・運上所）之監督」を受け、「必永久親睦之互市ハ連続致申間敷」とする。諸大名・豪商は「諸品物会所」の検査を受けて貿易することを許容して欲しいと願っている。万国は日本をインドのように見做している。これに対抗して「速ニ富国強兵之基ヲ開キ、吾亦四方ニ雄飛致候事ハ、先日建白之通ニ御座候」と述べ、蝦夷地の開拓と防備を力説し、ロシアとの友好、米国からの武器購入、話聖東府（ワシントン）への商館建設と貿易、広東への商館建設とロシア・イギリス・オランダへの使節派遣をして世界情勢を視察させる。これによって、「彼之千八百七十二年ヲ不待シテ、我モ亦世界中之強国」となると強調している。

斉昭・慶永・宗城の攘夷論者は、通商条約調印の具体化に際して三様の変化をしている。斉昭の蝦夷論も米国を無視しては成立せず、慶永は積極的な開国政策に転じ、宗城も攘夷論を心底に残しながらも、富国強兵のための開国には同意せざるを得なくなっている。

通商条約締結交渉の情報は、すべて宗城の許に届けられている。正月25日、「仙台候ヨリ回達書」の「覚」によって、12月29日の堀田正睦の演舌の内容を知った¹¹⁾「近来世界之形勢一変致シ」、日本も条約調印しなければ、「国務御挽回之期無之、(○中略)中興之御大業ヲ被為立、御国威御更張之機会モ亦此時ニ有之候間」と大変革の必要性を説いている。「十二月十一日、於蕃書調所、亜米利加使節へ応接仕候趣、左之通御座候」(対話書、井上信濃守・岩瀬肥後守)では¹²⁾和親条約締結以後の日米関係を要約し、通商条約の調印を前提とした交渉の内容が具体的に詳述されている。同じく「十二月十二日 対話書」¹³⁾でも井上清直・岩瀬忠震とハリスとの交渉が詳細に記されている。続いて「十二月十四日 対話書」¹⁴⁾も届いた。

安政5年正月から3月初めにかけて、軍事演習、樺崎砲台の試射、ゲペールの訓練をくりかえしていた宗城は、3月13日、宇和島を出発し参勤の途についた。19日船中で松平慶永の書翰を得た¹⁵⁾まず、堀田正睦の上京を伝え、「未た京都之光景何とも不明々不白々」としている。2月下旬、家臣橋本左内を京都へ派遣し、土佐藩主山内豊信と親族の三条実萬(清華家、安政4年5月～5年3月内大臣、その後も朝議に参与し、条約勅許反対、廟堂内の一橋派の中心人物)に慶永の書翰を届けさせた。こうして、諸藩の京都周旋が活発化するのだが、それは將軍継嗣問題と表裏の関係にある。その時点で、宗城は4月11日に江戸に着いた。

エ) 一橋派としての伊達宗城

石井孝は、將軍継嗣問題の起源を、嘉永6年6月27日、將軍家慶の死の直後に、次の將軍家祥(家定)の養子に、紀州藩主徳川慶福を迎えることを、数寄屋坊主組頭野村休成が井伊直弼に上書したことに求めている¹⁶⁾しかし、これが表面化するのには、安政4年10月16日、慶永と徳島藩主蜂須賀斉裕が、一橋慶喜を將軍継嗣として幕府に建議したことにより、それは条締勅許問題と直結していた。慶福を推す派が南紀派であり、井伊を頭首として譜代大名・近臣・大

奥が支持勢力であった。同時に南紀派は、反阿部正弘、斉昭を筆頭とする攘夷派に反対する政治勢力であった。井伊等には保守的譜代意識が強く、将軍に直結した幕閣の体制を希望していた。

安政3年12月18日、島津斉彬の養女篤姫が家定夫人となり、阿部・外様大名の立場は強化されたが、翌4年6月17日、阿部の病死により打撃をうけた。以後、しだいに南紀派が優位を占め、幕閣の大勢は南紀派で固まってくる。

一橋派の指導者は慶永・斉彬であり、安政3年10月6日、慶永が尾張藩主徳川慶恕に慶喜を推したのが最初とされている。堀田・井伊の幕政主導に反対する家門・外様の雄藩諸侯がこれを支持していく。翌安政4年には、政治的求心力を低下させた斉昭とは別に、慶喜を擁して幕政政革を推進させようとした。慶永・斉彬にとっては、慶喜は重要な切札であった。

同4年10月16日、在府中の慶永は蜂須賀齐裕とともに、慶喜を将軍継嗣とする兩人連署の建白書を提示した。ここで始めて「賢明・年長・人望」を条件とし、将軍継嗣問題が政治課題として表面化した。尾張・水戸の御三家、薩摩・阿波・因幡・仙台・福岡・佐賀・土佐などの有力大名がこれを支持した。ここに在府中の土佐藩主（大広間詰の代表）山内豊信が慶永に協力し、帰国中の斉彬・宗城は書翰の交流によって周旋した。斉彬は、12月25日付で上書し、ハリスの要求を認め、将軍継嗣には「器量・年輩・人望」の三点から慶喜を推した。斉昭の幕政介入は封ぜられ、通商条約成立に対応する国内態勢を確立させようという意味では、慶永の見解と基本的に一致する。また、一方、斉彬は同5年正月6日、近衛忠熙宛書翰で（忠熙は当時左大臣、島津氏と姻戚関係あり）、速かに継嗣決定の内勅を幕府に降下させるよう依頼した。一橋派は忠熙、実萬に依存すること大であった。さらに幕臣では海防掛有志の多数が一橋派で、大目付土岐頼旨・目付（のち勘定奉行）永井尚志・同鵜殿長鋭・同岩瀬忠震・箱館奉行堀利熙・勘定奉行水野忠徳らも建白し、勘定奉行川路聖謨もこれに加わった。

伊達宗城が江戸に到着したのは、安政5年4月11日であるが、この段階まで

の宗城の動向を見ておきたい。前年11月30日、宗城が禁裡等へ献呈した国産物の鰯の返礼が宗城に届いている。¹⁷⁾ その中に「当春は緩々拝接、種々得高話」とあり、同年春、江戸在府の宗城は実萬と面談していることが分かる。これに対し、宗城は正月16日に返翰している。前年の面接について、「卓偉之御実論相同、奉蒙御懇篤、積年希望暢達仕」と述べていて、安政4年春が宗城の朝廷に対する公式の接近の開始期であったと考えられる。また、上京について、「何レ近年中是非上京可仕、御時合宜敷候ハ、拝謁奉希上度、今日ヨリ願置候」と希望している。この間に山内豊信の仲介があった。書翰中で「扱又 関東外夷之御処置、大息絶望之御儀、追々之形勢、諸夷併吞、属国ニ不相成候得者不止様奉存候」と述べ、先述の海防掛のハリスとの対話書を天覧に入れ、忠熙も閲読したであろうという。宗城はいまだ斉昭の攘夷論から脱却しきっていないし、継嗣問題については触れていない。¹⁸⁾

将軍継嗣問題について、宗城は慶永・斉彬・豊信のように、強力な発言をする立場になかった。その斉昭流の攘夷論は幕府の忌避するところであったし、これを強行すれば国際情勢、国内の通商条約承認の動向にも反して、政治的に孤立する恐れがあった。それに加えて、一橋派として積極的な行動をとれば、親戚関係にある井伊直弼(藩祖秀宗の妻は井伊直政女)、宗城の兄山口丹波守直信(大目付になる)の存在から見て、宗城は慶喜擁立は強行できず、宇和島藩10万石の存亡に関わる問題でもあった。この問題を考えた養父宗紀は、宗城を牽制するとともに直弼に接近するのである。これが宇和島藩の将軍継嗣問題における弱点であった。

安政5年3月12日、宗城は御手洗沖で慶永書翰を得た。¹⁹⁾ 「一、例之 西宮一件、先々都合宜、多分什八九ハ一梁公(○慶喜)に帰し可申上、(○中略)乍去^(コソ) 社 弧城岸平岡夏之類(○南紀派を指す)、殊之外忌橋公居、(○中略)乍去大列侯ハ勿論、土岐丹波、土岐摂津、鵜殿民部、水野築後^{當時}、永井玄蕃、岩瀬肥後、川路左衛門、是等ハ皆一同有志之者ニ而、頻ニ申立居候趣、其外寺社奉行始も一同当春建議ニ相成居候由、如斯衆望故、是非梁公ニ御定之趣ニ被申候」

と、一橋派の結集と圧倒的優勢を伝えた。堀田正睦も内々慶喜を支持しているという。なお、同書翰で、クリミア戦争中に英将ミニエが製造した「ミニヘゲүүл」銃が命中率が高く(射程8丁)、筑地講武場に既に伝来していると伝えている。この慶永書翰には、2月24日付の鵜殿民部少輔の慶永宛書翰の写し(堀田の上京の件)、徳川斉昭側用人安嶋弥次郎から京都留守居鵜飼吉左衛門宛書状写しが付けられている。安嶋書状では、斉昭が直接太閤鷹司政通(関白九条尚忠とともに内覧として枢機に参加、通商条約については当初開国説を主張し、幕府を支持した。侍講三国大学の直諫により鎖国説に転じ、さらに橋本左内の入説により一橋派となり、九条関白と対立)に直接上申したいことがあるが、鵜飼に「御内々御沙汰之趣も御座候間、右之御意味柄何と欵 太閤殿下御聴ニ達御含にも相成候様、御扱ニ致度候」と慎重を期するよう含めている。「鷹司太閤殿下へ水戸老公ヨリ被進候御内書草稿之写」では、正月21日付で斉昭は政通に、「何分只今より御内備御手当御整相成、彼より兵端を開候節、大和魂を振起、防禦ニ聊差支無之様相成候方と下官ハ奉存候」と、従来の攘夷論を主張している。斉昭は林大学頭・堀田正睦らの条約勅許のための上京を、大坂湾警備の対策に転用しようと考えているのである。このように、朝廷対策は各様の系統があるが、大勢としては条約勅許・将軍継嗣の二点にあり、京都入説と対立抗争を重ねるのである。

3月25日、宗城は2月29日付慶永書翰を大坂藩邸で閲読した。この頃、従来極密に進められてきた一橋派の運動が、川路・鵜殿・永井らが老中まで進言し公然化している。慶喜の侍臣平岡円四郎からの情報によると、川路・永井の書状により、堀田の条約勅許工作は進展せず、孝明天皇は「関東ニ於而、我不容易時態之義故、早々建儲有之可然との事候よし」との内勅だという。「墨人之御所置」と「建儲之義」は次元を異にする問題と考えられている。大奥の状況は「極々六ヶ敷、何分忌橋公之英明、闔廷一同不服之由」と、南紀派の情勢を伝えている。

3月25日、宗城は三条実萬へ書翰を贈った²⁰⁾堀田らの上京工作を牽制しよ

うとしている。「天意之御模様、極密概略枢要之处、御内々相伺度」と述べ、伏見へ止宿して条約と建儲についての情報を得て江戸へ行きたかったのである。宗城は大坂町奉行戸田伊豆守からも情報を入手した。戸田には堀田らの京都周旋の情報はもたらされていなかったが、戸田の判断により「林大学等当地江相越候セツ承候所ニ而は、三公九卿皆真之素人ニて、外夷之情解候者無之」と朝廷内の実情を正確に伝えている。「京都之御返は、弥三家はしめ諸大名之赤心、今一応御承知被遊度との御返答ト云々」と、3月20日の堀田に対する勅諭も正確に伝えられている。しかも、条約調印について、「此節昔風之腐儒論ニ而は乍^(ママ)ち血戦之地と可相成」と、条約調印の上さらに国力を充実し、「宇宙横行、天下之強国と可相成見込無之候而は、益危哉と奉存候」と、宗城の攘夷論を批判する如き文言も見えている。宗城は京都における一橋派の動向に関する情報は十分に収集したと考えられる。

3月27日付「三条公御答書」によると、²¹⁾実萬は「大意之御模様極密御承知も被成度との事」と述べていて、とくに宗城は実萬からの正確な情報を求めていることが分かる。しかし、実萬は海外情報には暗く、攘夷論は持たないが、政局の事態挽回、富国強兵の見込み、内地雑居、信教の問題、「国威更張之機会も在此時と之見込、如何程之事ニも可有之哉」と述べているように、当面の諸問題の解決策について、橋本左内の説得にも拘らず自信を持っていない。堀田への勅諭もその表現であった。ただ、建儲については斉彬からも工作があり、近衛忠熙と協議して慶喜擁立論を固めたいが、「彼是入組候都合も有之、心配候」と結論を出していない。事態は継嗣問題について公卿への工作を強化し、それによって幕府を牽制する方向へと動いた。また、実萬は大坂近海の防衛を幕府に依頼したいといい、「彼是紛問荒々及御報候」と結論し、宗城の活動にも期待している。²²⁾

安政元年正月から3月にかけて、一橋派と南紀派の井伊直弼とその家臣長野主膳らの京都における激しい攻防があった。長野は関白九条尚忠を掌握し、一橋派は鷹司政通・輔熙父子、三条実萬を説得した。一時は一橋派が有利と見ら

れたが、南紀派の強力な捲き返しによって敗退した。一方、条約勅許問題は幕府の戦術の拙さから勅許は獲得されなかった。条約調印と同時に慶喜を将軍として、幕政を刷新しようとする慶永の構想も挫折した。しかし、朝廷内に孝明天皇を始め中山忠能らの攘夷論が残存していることは忘れてはならない²³⁾

さて、4月23日、井伊直弼の大老就任、6月19日の日米修好通商条約調印と徳川斉昭、同慶恕らの登城しての反対と慶喜擁立の最後の発言、6月25日、幕府の将軍継嗣は和歌山藩主徳川家茂に決定の公表に至る動きを、宗城の身辺から見ておきたい。

3月19日付慶永書翰によると²⁴⁾ この段階では、「桜閣(○正睦)之拙策」を、朝廷内の青蓮院宮朝彦親王・三条実萬・中山忠能・徳大寺公純・萬里小路正房が見抜いた。しかし、「関白(○九条尚忠)大高明一革因循姑息と相成申候由」と、関白の変心を告げている。幕閣内でも鶴殿・水野・永井・川路らの有志の強力な運動にも拘らず、幕閣は慶喜擁立を明確にせず、問題は堀田の帰府後に持ちこされたと見ている。

3月29日付慶永書翰では²⁵⁾ 三国大学からの情報により、20日に正睦が参内して、小御所で勅答があつたが、堀田の対応や朝廷の動きを伝えている。条約勅許も将軍継嗣もいずれも未解決のまま、堀田は帰府することになる。この書翰中で、慶永は3月12日の88人の公卿列参の事実に触れている。4月3日、慶永は宗城の世子宗徳に呈書し、宗城に伝えるよう求めている²⁶⁾ 「先日大膳君(○宗徳)へ相願、御旅館まで差立候密書之節者、勅答而已ニ而危殆中活路有之候、昨今之様子窃ニ廟上混淆、日々之浮雲変換又無極、殊ニ内実而三日中ニ社稷安危之分別と可相成」と、帰府直前の宗城に事態の急変を告げている。徳川慶恕も「何分御開悟無之」と態度を変えたという。慶永は「其周旋之道絶果申候、是第一之難事也」、「水老公も是非此儀申上、御相談之心得に御座候、是第二難事也」、「今度ハ死期、正至天下滅天下ハ 徳川のみに
あらず皇国をいふ也遂ニ焦土之兆と被存候、是第三難事也」、「公武不熟、公中又不熟、武中又同断、此節有志諸役人(○中略、土肥頼旨・鶴殿・永井・岩瀬等)為閣老被猜忌候趣、是第四難事也」、「禁

中暴論之上万安策無之，優柔不斷，閣老中又同斷，第五難事也」と、五項の難事を挙げて、非常事態の到来を告げている。²⁷⁾

4月11日に宗城が帰府し、20日に堀田が京都から帰った。宗城は在国中、直接的な周旋活動はできなかったが、江戸藩邸からの情報、慶永らの書翰、上府途中の三条実萬らとの交流を通じて、政局の把握は十分にできていたであろう。

宗城の上府の頃は、条約調印・将軍継嗣の両問題とも最後の山場を迎えていた。4月11日付慶永書翰では、²⁸⁾ 宗城の江戸到着を祝し、近く山内豊信と2人で訪問すると伝えている。同時に「土佐侯御書」も到来し、堀田より先に帰府した岩瀬忠震から京都の情報を聞き、「尤瞭然，実ニ恐怖之至奉存候」と条約問題に触れ、継嗣については「是ハ大ニ御都合宜^(ママ) 赴，此上恐悦ニ御坐候」と忠震ら海防掛の一橋擁立の樂觀論を伝えている。「土佐侯ヨリ三条公へノ呈書」も添えられ、そのなかで条約調印問題については、「此四五年前，初而渡来(○米国艦隊)之時ハ打払勿論に候得共，方今ハ決し而左様ニ無之，不可討之勢ニ候」と、宗城らの攘夷策を批判している。開戦の場合、大坂(京都)・江戸の防備が中心となるが、「其時ハ如何御処置被為在候哉」という。諸侯を含む主戦論は「是ハ書生同様之論ニて，戦争ニ及候後之策ハと推ス時ハ，茫乎不得答候」と、無謀と説き、88人の公卿列参も「恐怖之至」とされている。豊信・慶永・斉彬が攘夷論から脱皮したとき、当然、宗城は斉昭に追従はできないことになる。

11月付の「佐賀侯建白」(鍋島直正)でも、条約調印を「御国辱をも御厭無之，穩和之御取扱被為在候御事，御尤至極之御儀ニ候」と、条約調印を是認している。三家を始め国持大名も集めて評定し、攘夷論は心ならずも棚上げにし、「自国防戦之術委く習熟為仕，武器兵粮之事手当向等も具ニ指揮仕，非常之節ニ至り御助力を為仕度奉存候」と述べている。幕末における佐賀藩の軍事改革の基本姿勢が表現されているといえよう。

4月8日付「土岐丹波守殿(○頼旨)ヨリ越前侯へ返書」では、一橋派の土岐は岩瀬から条約勅許の得られなかったことを聞き、堀田の帰府を待つとしながら、岩瀬は「此上ハ無是非万国の為ニ御談も変可申旨，左様ニ御承知可被

下候」と言っている。一橋派は土岐・永井・鵜殿・鍋島・岩瀬らが必死の運動を展開しているが、すでに3月22日の内勅では、「年長」の文字が削除されていることを土岐は探索している。

「越前侯一橋卿へ呈書」では、慶永は慶喜に「格別過激之異論を被為発候御儀ハ有御坐間敷とハ奉存候得共」と、慎重を期することを求めて、海防掛の「激論」に注意をうながしている。これに対し、「一橋卿ヨリ御答書」では、慶永は「万一御尋有之節ハ、定見無之趣申上候心得ニ御坐候」と答えている。

4月14日は慶永書翰では、²⁹⁾「越土互に忌諱嫌疑争功之義等勿論無之」、赤心は鏡の如く協同していると宗城に伝え、豊信の功労が大であると評価している。慶永は継嗣問題を優先して考えている。『昨夢紀事』は、橋本左内と平岡円四郎、水野頼旨らの合議、豊信・直正との協議によって、慶喜擁立の構想を捨てていない。

オ) 宗城の思想の変化

4月18日、慶永は江戸藩邸の宗城を訪問し、豊信も来た。³⁰⁾ 前述のように、慶永は宗城の参勤上府の旅中にも拘らず、度重なる書翰によって国内外の情勢の変化を知らせた。これは、かつての攘夷論ではもはや時局に対応できなかったからである。その「同志」に対し、「此度の墨夷の一条將 勅答杯の事についてハ、御旅中より御申越の事もありて、御議論合兼候御次第も有之、此侯は当時大広間諸侯中ノ巨擘にて、此侯ノ議論によりてハ一席の離合にも抱ハるへき属望に座せハ、先達て已来、土佐殿と御示談ありて、御参府あらハ早々被及御討論御説破可被遊との御目論見なりしか、此比御着府ありし故、今日御出になりたるなり」とある。つまり、慶永・豊信は宗城の攘夷を説得し、幕府改革を主眼とする真の一橋派とすることを目的とした。宗城は条約調印を「叡慮之通りに御随順なくては相済ましき」との持論を述べた。慶永は「東西（○江戸・京都）の形勢 ^(ママ) 餉まで御説得の上、京論のことくにて方今必勝の策ある歟、永久安全の御定見ありやと、切々僣々御難に相成し処」と、理を尽くして宗城に説い

た。宗城は「良久默然瞑目にて御深考あり、其上にて御発語ありけるハ、当今の時勢に熟達せずして固陋の意見を立たりしハ、全く拙者の誤にて候ひき、御諭告によって雲霧を披いて青天を見る心地と罷成候へハ、最早異議に及ふへからず、墨夷の方ハ御条約通り御済ませにて、内地変通の御改革これあり」と、ようやく攘夷策を破棄するに至った。宗城の思想に大きな転機が訪れた。そして、結論は大広間詰の豊信と相談して、大広間詰諸侯の異論を論破することになった。宗城の一橋派としての残る問題は、井伊直弼・山口直信との親戚関係であり、その活動は大きく制約された。

同18日、斉彬も慶永に呈書している³¹⁾ 斉彬は在国中で、指宿の旅亭にいた。斉彬も「京にて只今と相成候て無謀の打払被仰出候而ハ、猶更後年御恥辱可相増」とし、堀田閣老が無事に帰府することを望んでいる。文中に「仙台の事、龍土へ御相談可然奉存候」とあり、宗城に仙台藩への工作が求められている。斉彬は諸大名の連合による幕府への圧力、ないし「嚴重の勅旨」によって、一橋派としての幕政改革を考えている。

カ) 将軍継嗣問題と条約調印

4月19日、翌日の堀田の帰府を前にして、慶永は蕨駅宿泊の堀田に呈書した³²⁾ 慶永は「第一に橋公建儲の御一大事たる義ハ第一の肝要勿論にて、神明ニ盟ひ疑無之候」と持論を重ねた。今度の帰府は宿弊を改革する好機であり、「明日にも建儲の御定議懇願に候故(○下略)」と述べている。この夕方、慶永は橋本左内を岩瀬忠震の許に派遣した。岩瀬は慶喜擁立の強力な反対者は本寿院(家定の生母)であると述べ、「備中守(○正睦) 帰府せられなハ、先づ第一に 勅答の次第により諸侯の赤心御垂問、次て墨吏の応接、夫より建儲、随って宰輔を置かる等の順序を逐ふて発表あるべきなり」と、仮条約の調印を主張した。山内豊信も「当春とハ趣変りて其穏和、且議論も順正の事共にて」と、思想的に変化していると認識し、尾張藩主徳川慶勝の動向には注意を払っている。

4月21日、慶永は堀田に面談し、午後宗城・豊信・水野忠徳(幕臣、5年7

月外国奉行) が越前藩邸を訪問した。「当今の事務共種々御論議御講究あり」、水野は幕府海防掛の内情を話した。22日、堀田は將軍家定に対し、慶永を大老に推すことを進言した。この日、慶永は宗城に貸与していた斉昭の「愚考三策」の返還を急ぎ求めていることであるように、³³⁾ 斉昭の所論は人望なく、攘夷論はもはや過去の遺物となっていた。慶永大老論の根拠には、慶喜を家定の世子とする前提があったが、將軍はこれを斥け、23日、井伊直弼を大老に任命した。幕閣の権力は南紀派に帰し、再入閣の老中松平忠固がこれに協力した。

同日、直弼から宗城に大老職に就任の通知があった。宗城は井伊家とは仙台藩伊達家を含めて重親の関係にあり、一橋派としては宗城を井伊工作に当らせたいところであったと考えられる。直弼は慶喜擁立を「水老公隱謀有之、當 將軍様を押込、一ツ橋様を立、御自身御権威御振ヒ可被成御隱謀有之」と考えていたようで、³⁴⁾ 幕府海防掛も宗城も直弼に忠告するところがあった。直弼の大老説は將軍家定の上意であった。

これに対し、幕閣内の永井、鶴殿、岩瀬ら有志は憤激して反対し、老中に詰問し、慶永の側近橋本左内等も活動した。井伊はこの反撃に対し、阿部、堀田の幕閣を支えてきた海防掛の実力者を排除する。慶永らは直弼を「無職にして強暴の人」で、坐禅、猿樂、茶道を好むのみというが、³⁵⁾ 直弼は尊大ではあり、海防掛らの主張を不敬とし、幕藩制国家の秩序を改革しようとする一橋派を排除するに至る。

4月27日、慶永の側近中根師賢が麻布竜土の藩邸に宗城を訪問した。³⁶⁾ 直弼は「此度の 勅答一件」(勅許なし)について、大広間諸大名の建議の内容を心配していると宗城が言った。宗城は直弼に「一紙連名」にして提出させてはどうかと言うと、大変に喜んだと言う。さらに直弼は堀田の上京周旋の失敗を取り上げ、堀田等の排除を示唆した。宗城はそれでは「叡慮」を安んずることにならず、ハリスとの条約締結交渉に携わってきた海防掛を左遷しては、交渉に支障を来すと述べた。宗城は「余初諸侯とても思ひ寄たる事杯ハ、老中へ推参して憚る所なく申立候へハ、是ハ時勢の変にて、彼等か罪とも申難かるへ

き與、肥後（○岩瀬）杯ハ専ら墨使（○ハリス）の応接に心を入れてものし候へハ、事を就さんとおもふ上よりして、自然と切迫なる語気も候事」と、直弼に意見を述べている。継嗣問題については、「御承知も候へし、今日天下大難の時に当りてハ、猶更御国本を固めらるへき事にて、建儲の一大事こそ御急務と存候なれ」と強調し、「諸大名を初人心の安堵専一の事候へハ、方今の人望刑部卿（○慶喜）殿に如くハあるましと存候」と、慶永、正睦らの見解に沿って、慶喜に決定するかに見えていた。しかし、直弼の大老就任となれば、紀州藩主徳川慶福の外はないことになる。直弼は慶福に決定しても忠勤を求め、宗城は「二心なき事ハ誓って申上へけれとも、失望すましきとハ申難くこそ」と言い、直弼は不興げに見えたという。

直弼対策については、「水野筑後守殿、越前侯へ答書」³⁷⁾に、「元来伊予入道知己に付、同氏を以御説得可被為在」とあるように、伊達春山（宗紀）が動いていた。4月27日、宗城は直弼に呼ばれて藩邸を訪問している。直弼は4月26日付書翰で³⁸⁾「誠ニ愚昧者、当御時勢不勘弁至極恐縮仕候間、勅答云々ニ付御内諾可被下旨、今ニ不始御深切之段、忝次第ニ候」と述べていて、兼ねて春山の周旋があつて、直弼は宗城の意見を求め、その時の話が『昨夢紀事』に記録されたと考える。

4月26日付慶永書翰では³⁹⁾継嗣問題について、「再び南紀論蜂起申候」として、左内を宗城の許に派遣し、豊信を越前藩邸に呼ぶなど、「有志固結候ハ、亦興業の秋も候半」と、南紀派の嫌疑にも拘らず、運動の手を緩めようとはしていない。

同月28日、宗城は慶永とともに豊信を訪問した⁴⁰⁾。用件は建儲問題で、直弼の大老就任後、幕閣の様相が一変して南紀派が台頭した。「素より大老は不学無術の人」だが、「伊賀（老中松平忠固）といへる奸物の附添ありて蠱惑せるなれハ」と前提して対策を協議した。第一に大老を説得して継嗣を慶喜に定め、忠固は京都に勅答を求めさせるため派遣するよう、宗城が周旋する。この慶永らの方策について、宗城は慶永自身の上京を上策とし、孝明天皇も慶喜擁立に賛成だ

から、「此事降勅あらんハ必定とこそおもはるれ、如此ならハ大老も伊賀も何事がはある。一挙に事定まるへし」と提案した。豊信は妙策として賛成したが、慶永は「非才の重信堪ふへきにあらす」と固辞した。

ついで、宗城は有馬頼永邸に行き、斉彬の老女小ノ島（将軍家定夫人の付添人）と密談した。これは大奥対策である。いうまでもなく家定夫人は斉彬、さらに近衛忠熙の養女であり頼永夫人は斉彬の養妹であり、頼永の世子慶頼夫人は家定の妹であるという閨閥から発想されたものである⁴¹⁾ これにも春山の動きがあった。岩瀬忠震は「西城の御事杯も入道より申勧め給へる様にハなりしか」と考えたという⁴²⁾ しかし、本寿院は自殺するとまで言い、一橋派の工作は難事であった。一橋派も将軍継嗣問題は家定の英断によるとし、「此度諸侯の建白にも此御事は書載さる様ありたければ、遠江守殿杯のさし心得て御周旋あらん事を頼ミ申さるゝ由なり」と、『昨夢紀事』は書いている⁴³⁾

5月1日付井伊直弼書翰では⁴⁴⁾ 直弼は宗城、慶永等の考えを「同じ御為と申も筋道相立不申、押付ケ間敷相成候而ハ、又々故障も出来可申事」と、直弼の考える幕府政治の正道に沿って忠節を励むよう求めている。この段階では、宗城との間に断絶的乖離を来たして論争するのではなく、「兎角往々御力を合せ、磐石之御代ニ復し候事を仰候事御座候」と、慶永も含めて一橋派を説得しようとしている。この日、徳川慶勝の建議では、条約調印について、「公武御一体相成候ハ、天下之人心致一和、永世御安全 皇国御保護之節欤と奉存候」と幕閣に公武合体の思想を提案している。

5月2日、慶永は彦根藩邸に呼ばれた⁴⁵⁾ 直弼は「先ツ当今の急務ハ何事ニ候半か」と質問した。慶永は「目今となりてハ外国よりハ御国内の御扱こそ御大切と被存候也」と、条約調印よりは内政改革を重視すると述べた。勅許問題については、堀田の上京前に、慶永は「備中には睨と見据もあるかと及研究ひしに」、堀田は軽く成功を見込み、大事を誤ったといった。現在では、諸大名一致（公武合体）の建議によって、「叡慮」を安んずる外はないと直弼は言い、諸侯に人望のある慶永にその周旋を求めた。直弼は継嗣問題は持ち出さなかったが、

慶永は去秋の建言以来言う通り、「英明賢才の御徳義によらでは、万全の計二候はず」と持論を唱えた。直弼に対し、明確に慶喜の名を出して推挙した。直弼は「拙者の思ふ所は紀伊殿ならてハ適ひかたし」と反論し、これに固執した。この日の激しい論争によって、両派の対立は決定的となった。

5月3日、宗城、豊信は慶永邸で、「正義を挽回せん事」を協議した⁴⁶⁾しかし、「岩瀬（○忠震）ヨリ左内へ書翰」にあるとおり、直弼の意志は固いが、「此上必回天之妙機無とも難申哉ニ有之、如何廟議も急にハ決し兼可申候」と、幕閣内の状況にはまだ微妙な空気が残っていた。ハリスの条約調印延期の承認のことも記されている。伊達春山はこのころ、さらに井伊邸を訪問している。

5月5日、大目付土岐頼旨は大番頭に、勘定奉行川路聖謨は西丸留守居に交迭され、直弼の一橋派に対する有司追放が開始された。岩瀬忠震らへの処置は条約調印問題があるため延期されている。翌6日付小野島の宗城宛呈書には⁴⁷⁾将軍継嗣はいまだ治定せず、「上にも御心配、実以御困り之御様子」と伝え、大奥工作は中止して「御表手入の方可然事」と見解を述べている。斉彬、宗城らの大奥工作は成功していない。

さて、徳川斉昭の動向について触れておこう。

4月18日付斉昭書翰では⁴⁸⁾吉見左膳（長左衛門、宇和島藩参政。安政5年4月の宗城の上府に随行し、宗城の側近として一橋派大名らとの連絡に当たる）が、武田耕雲斎らを訪ねていることを記している。斉昭は「奸臣共近来兇之勢にて、無根之浮説ヲ申触シ」と水戸藩の内情を伝え、左膳には斉昭と藩主慶篤の間に「父子之間ニ隔意等者一切無之」と伝えている。5月23日付斉昭書翰では⁴⁹⁾斉昭の「上書一条」について宗城が意見を述べ、斉昭が正睦に会い、その文言をさらに訂正せよといわれ困惑したとつたえている。斉昭の条約強硬論はついに通用せず、この点については慶永、宗城とも一線を画していた。

この「上書一条」とは、「水戸老侯、越前侯へノ御書」にいう5月3日に斉昭が幕閣に提出した「別紙」（「水府老公献議」）のことであろう。慶永も披見し、斉昭は幕閣の訂正要求を「奇なる事ニ候」と述べている。この書翰中で、斉昭

は「伊達拙家へ参候儀ハ、くれくれ断申候故」この旨宗城への伝達を慶永に依頼している。幕閣の嫌疑を避けるためである。

5月9日、慶永は堀田正睦に面会した⁵⁰⁾。堀田は斉昭の建議を「例の御流儀ニて、甚忌諱ニ触れ候御文段も有之」とし、幕閣の意向に沿うよう訂正することを依頼した。慶永は斉昭に訂正の意志はないだろうとし、自ら政治課題として「京師の御取扱、御警衛の次第、諸侯の疲弊御救、兵制之一致、航海術御開き、海軍の操練、耶蘇教の御扱い、蝦夷地の開懇、諸蕃の居住、交易商法等の件々」を挙げて討論した。堀田は「当否は先ツ指置、粗見込ハ立て置れ候趣ニ候へ」と言い、松平忠固が「兎角ニ旧套固執の癖有之、変革の事ハ更ニ心ニかけ候はず、近来ハ大老の後援を得て愈勢ひ猛くなり」と幕閣の内情を明らかにして、南紀派の優勢を指摘した。直弼の大奥工作の実情を告げると堀田は驚き、「唯大老の強暴の言行こそ恐ろしく候へ」と言った。この日、「水野筑後守殿ヨリ越前侯への答書」によると、「紀党弥得意ニ被察、(○中略)救薬の施方も無之儀故」と、一橋派が守勢に至ったことを伝えている。南紀派は紀州藩付家老(新宮城主)水野忠央らが藩権力を掌握して、直弼と結んでいた。

5月13日、宗城は堀田、井伊に面会した⁵¹⁾。翌日、慶永はその内容を知るため、中根雪江が竜土邸に行った。宗城は斉昭が建白書の文言訂正を承諾し、これを堀田に伝え、さらに慶永の京都派遣を提案し、堀田も「いとよかるへき」と言った。ついで、井伊に会い、「今後の御処置次第にて建白の模様もある事なれハ、心得迄に承置度」と言ったが、井伊に定見はない様子で十分な返答もなかった。宗城は、先述の慶永の京都警衛、西洋陣法、交易、航海術、信教の問題等を挙げて井伊に質問したが、明確な返答はなかった。かえって、海防掛らの激論を不敬とし、継嗣問題についても未決定とした。宗城は「大老の胸中ハ唯一箇の我意ある而已、策略に至ってハ空茫として一物なし」と雪江に結論を述べている。

5月14日付直弼宛宗城書翰では⁵²⁾内憂外患(朝廷と米国)の問題について、「此御一挙極而御大切と奉存候間、御遠慮有御座度」と忠告し、自分の考えは

「確平不動」としながら私意の主張ではなく、「天下之公論，天下之公願に御座候」と、その立場を明確にしている。

5月15日、慶永は登城して宗城に、大広間建白について調整したが、この日すでに大広間詰大名から幕閣に提出された後であり、慶永は失望した。さらに慶永は岩瀬忠震に会い、直弼、大奥は慶喜を忌避していると伝えられた。宗城は徳川慶勝に会い、慶喜擁立について賛同を得ている。⁵³⁾ 慶永は堀田正睦に会い、老中を罷免されるよりは、抗論して直弼・忠固を圧倒し、「建儲の大策」を確定することを迫った。正睦は將軍家定の優柔不断な資質を語っている。⁵⁴⁾

「藍山公記」によると、⁵⁵⁾「富田織部東行雜記」が引用されている。富田は三条実萬の家臣で、5月20日、土佐藩上屋敷で宗城とも会って、「当時形勢之御議論」がなされた。問題は条約勅許にあり、宗城は「兎而も方今鎖国ニハ難相成云々」と述べ、富田も京都の大勢は鎖国ではないとした。宗城が勅答の件を問うと、富田は幕政の「大変革との御儀なれハ、更ニ是迄之御手順ニハ御頓着不被為在欵、なれとも其辺私共得かたく云々」と明言を避けている。さらに富田は宇和島藩若年寄吉見長左衛門と連絡することになった。これらは松永慶永の「時勢急務策」草案とも関連し、越前藩内では中根雪江・橋本左内がその添削をし、その趣旨は実萬・豊信にも知らされていた。富田は実萬の意を受けて、豊信に京都情勢、継嗣問題、幕閣の人物評、ハリスのこと、慶永・宗城にも話した。土佐藩では目付役大脇興之助、用人小南五郎右衛門・伊駒猪之助が立ち会っている。水戸藩では斉昭の側用人（安政5年7月家老）安島帯刀（弥次郎）が動いている。富田は豊信に開港後の信教問題について考えを聞いて帰京したいと言い、豊信は「方今差当り候一大事ニ引くらへ候ハ、尤小事と存候」と、新教と旧教の布教の差を認識して、米国人の居留地における教会は認めている。さらに、富田は慶永にも会い、「土佐殿とハ従来格別之知己ニ付、毎々御様子（○実萬の）モ承知仕」と述べ、「誠ニ 今上叡慮、徳川を御世話被遊度思召之程」に感謝している。

『昨夢紀事』によると、⁵⁶⁾ 豊信の慶永宛書翰を引用して、豊信が宗城と相談し

て、直弼と老中上田藩主松平忠優との離間策を練っていること、つぎに「藍山之失言」に言及している。それは、宗城が富田に「此度之仮条約御免シニ相成候而ハ、日本禍乱之根本也、只兵端を開ク遅速有ル而已」と述べたことにある。豊信は富田に「折角京都之激怒を発シ不申様周旋仕候処」、宗城の発言は公武間に疑念を生じさせることになるというのである。また、「藍山之一言、川路(○聖謨)之栗田ノ宮(○朝彦親王)へ之失言と一轍と存候」と豊信は言い、仮条約論で一致させていた一橋派の外交策を分裂させる発言と捉えている。このことは、宗城の事態認識が慶永・豊信よりも、情報収集力の弱いため甘い点のあったことを示す。当時、一橋派は南紀派によって幕府吏僚がさらに次々と左遷させられていた。鵜殿民部少輔は駿府奉行、駿府奉行大久保右近将藍(忠寛・一翁)が禁裡付となるなどしていた。

5月21日付慶永書翰では、⁵⁷⁾安島帯刀から中根雪江への来翰を告げ、明日にも徳川慶勝に会うよう宗城に勧めている。慶永は「叡慮丸潰しと申事は、とこ迄も無之、(○中略)萬々 叡慮相立候ハ充分相立、又関東御処置、無已事ハ相立不申候而者難相成事、御同意故、別論不仕候而も宜候へ共、為念申上置候」と付言していて、このなかに慶永の公武合体論の芽生えを読み取ることができよう。また、宗城の慶勝への面会は、「別紙」に「先日(○慶勝が)福井侯と大ニ御異論ニ而、喧嘩半分御分れに相成り候間」という経緯があり、その和解と建儲建白は年長・賢明を強調して欲しいというにあった。

5月25日付宗城書翰では、⁵⁸⁾尾張藩からの面会謝絶に失望し、さらに慶永に「御遠略も御坐候ハ、御懇示被成下度」と希望している。慶勝は嫌疑を憚ったのである。「越前公御答書」では、「実ニ僕に至るまでも失望至極之事」と述べ、橋本左内等を動かしている。宗城は吉見長左衛門に命じて、安島弥太郎に照会させた。

5月26日付の「安嶋弥太郎書簡」(吉見宛)によると、⁵⁹⁾安嶋は「尾藩有志之知己へ周旋為致」、慶勝を納得させる案に賛成している。これは田宮如雲には嫌疑があり、田宮は慶永自身ならば相談可能としたという。慶永は慶勝の条約勅

許必須論を抑え、反幕的内容の建白書を提出させまいとしたのである。「越前侯御答書」によると、慶永は宗城にも慶勝への呈書を勧め、その内容を閲読しておきたいと述べている。

5月28日付慶永書翰では、⁶⁰⁾ 結局慶永も慶勝が病気との理由で面会は断られた。慶永は「兄(○宗城)を欺、安(○安嶋)を欺、我を欺候と不堪激怒」と述べている。慶永の慶勝宛の長文の返書では、継嗣問題に触れ、「関東建儲之義勸慮者素より鷹大^(ママ) 閣殿左府公始三公、何も橋公御見込之由」と明言し、幼年の徳川慶福の継嗣は後年の問題とし、当面は慶喜を強力に推している。5月30日、慶永は慶勝に呈書し、重ねて慶喜を推すよう要請している。

5月22日、宗城が彦根藩邸を訪問した時、直弼は「京使も今以定り兼、西城も兎角紀とも決し不申」、心痛していると言っている。⁶¹⁾ 継嗣問題は、両派の対立のなかで、もはや代案はない政情になっていたのであるが、直弼は宗城に本心を打ち明けようとはしない。

同22日、慶永は斉昭に書翰を送り、⁶²⁾ 安嶋弥次郎を通じ、「方今之御時勢、実ニ危殆相迫り」と、一橋派が幕府海防掛等の左遷によって苦境に陥り、「天下の安危ニも係り候事と苦心仕申候」と認識している。「御書取」の第一では、慶永の把握する一橋派とは、幕臣では土岐丹波、同摂津・岩瀬肥後・鵜殿民部・永井玄蕃(尚志)、津田半三郎、諸侯では越前・土佐・伊達・薩摩であり、他に奥小姓諏訪安房・権太遠江の2人がある。南紀派の圧力について、慶永は堀田正陸に閣老としての責任を取るよう説破したが、もうかつての実権掌握の人物ではなかった。諸大名もほぼ条約調印を是認しており、このことは近く京都に返答されるであろうという。しかし、現状では「中々被安 宸襟候処ニてハ無之のみならず、列侯も一同失望可仕」と慶永は考える。つまり仮条約調印が行われるのであれば、諸侯から幕府は違勅の責任を問われる。この反論に対抗するためには、「第一賢明之建儲有之、関東之威権を厳にし、総て京師之宿衛を壮にし、衆望を為厭候事」等の対策が必要とする。とくに、違約は徳川家の社稷にかかわると、斉昭に訴えている。第二では内政の整備、貿易による国益、英明

の大元師の任命、財政の充実、艦船の建造、武事講習を挙げて、西洋諸国の「彼長を取て我短を足し」と、急速に追いつくことの必要を説いている。第三では、幕府内の「奸凶を除て、威権を宗室（○徳川本家）に帰し、宇内渴望之国是を定」めることを肝要とする。第四に「天下之公論ニ随、宗室中英明之方御推薦ニ而、追々良法善政」を施行すれば、民衆も慰撫され、外夷も自ら跳梁を止めるとする。以上が、一橋派の主張のまとめと考えてよい。

翌23日の斉昭の返書では、「進良策も無之候」と述べている。この日、斉昭の宗城宛書翰では、堀田正睦に会い、上書の文言訂正に触れたと言っている。

5月27日付豊信の宗城宛書翰では、⁶³⁾ 豊信が堀田に会い、「西城建儲之一条、俄然様子相変候赴」と知り、「大ニ失望仕候」と述べている。同28日付の在国中の斉彬書翰では、⁶⁴⁾ 「御建議第一」、「西城御治定専一」と述べ、大奥の情報を伝えるとし、「尾州阿州案外之所」とし、徳川慶勝・蜂須賀斉裕が一橋派から離れていることを指摘している。5月晦日付慶永書翰では、⁶⁵⁾ 堀田が「御筋目之御方養君云々と而已、橋紀ニ沙汰ハ無之、賢稚分判ハ来月下辭、七月上旬之内と申事、是真之発露也」と知らせ、慶永は「回天之施策肝要」と宗城に告げている。

『昨夢紀事』によると、⁶⁶⁾ 6月朔日、慶永・豊信・宗城が協議の上、書翰を三条実萬に送ることになった。一橋派の最後の反撃であった。宗城の書翰には「最早方今余ニ愚策も無御座」とし、將軍継嗣については「御人物之義、以御名指被仰出度」とし、「仮条約之儀被遊 御許容旨嚴重 勅諭被 在候ハ、挽回も可期哉（○下略）」と述べ、両件を勅諭によって一訃に解決することを考えていた。慶永は、6月8日斉昭への返書で、堀田正睦からの情報で「養君之発表ハ十八日比之由、乍併是ハ從 京都之御返答次第との事と奉存候」と述べている。⁶⁷⁾ 慶永は14日頃に勅答が来ると正睦から聞いている。同日付宗城宛書翰で、⁶⁸⁾ 直弼は一橋派對策に、宗城の実兄山口丹波守を利用し、慶永・豊信の説得に当たらせていたことが分かる。さらに宗城の養父春山もたびたび直弼邸に出入し、宗城との調停を試みている。

6月9日、宗城は直弼邸に行った⁶⁹⁾話の内容は、直弼が老中松平忠固の陰邪を知って激怒し、宗城は姦人忠固の排除を勧めた。直弼は自分の持論が南紀にあることを忠固が知って、ついには大老に圧力を加えていると言った。条約の件は決定しているが、継嗣は未決定であると直弼は話し、宗城に南紀に決定しても忠誠を尽くすよう、また、慶永にも伝言するよう依頼している。この間の事情を見ると、宗城は実兄、養父の制約を受けて直弼に逆に周旋を依頼されていることになる。

6月14日朝、慶永は堀田正睦に「御答建白」を提出した⁷⁰⁾「勅答并御書附」の内容について、幕府は仮条約調印以外の方策を持たないことを重視し、その後の防衛を始めと内外政策の確立を求めている。日本の富強盛大の策を強調した。実は京都よりの返答は未着であった。慶永は幕府は23日に公表との情報を宗城に伝えている。慶永はこの時、天津条約調印後、英仏大艦隊が来航するという情報を得ていて、そうなる幕府は違約調印、違約建儲になると考えている。

6月17日、宗城は昨夕の大老との問答について、慶永に返書した。直弼は勅諭が慶喜とあっても幕閣には反論が強く、「今日ニ至、廃紀立梁とハ六ヶ敷」と言った。「除姦の策」については、宗城は慶永の意見を代弁して、直弼は同意したという。

6月16日付宗城宛墨田長溥書翰によると⁷¹⁾「追々英仏魯亜ヲーステンレイキ五ヶ国之船三十艘計、長崎江参り、都合次第江戸江可参之旨、亜人申候由」と伝えている。18日には慶永も「五日の間ニ英仏三四十艘程江戸へ来ル由、亜人申立候」と伝えている⁷²⁾ハリスはこの情報を利用して、条約調印を強行した。井伊直弼は条約勅許を優先していたが、老中松平忠固や海防掛は即時調印を主張し、6月19日に日米修好通商条約は調印された。直弼は調印の三ヶ月延期を獲得していたので、残る期間中に勅許を得るとともに將軍継嗣を決定し、まず幕府内の一橋派を一掃する考えであった。6月18日、岩瀬忠震は慶永に、英仏艦隊が来航しては「如何なる御不都合ニも可至哉と不堪杞憂、何卒御鼎力を奉

仰度、宇高両侯（宗城・豊信）江も可然御談判所希御座候」と、慶永ら三者に了解を求めている。⁷³⁾ この日、宗城は慶永を訪れ、18日夜大老から以上の経過を知らされたことを語っている。⁷⁴⁾ 宗城は一橋派の諸大名に直弼の説に加担するよう説得を頼まれたのである。松平忠固は「奸状明白」、堀田は「京都の始末等も不束なれば」と、両人の罪状は異なるが、老中罷免に言及されている。宗城・慶永は正睦は外国事務宰相として在任させておきたかった。

6月20日付宗城宛直弼書翰では、⁷⁵⁾ 幕閣内の不一致もあり、同日の惣出仕は22日に延期されたと伝えている。宗城は直ちに慶永に呈書し、「昨夕御察示之野父（○春山）愛牛（○直弼）へ罷越、除姦之決策」と述べ、さらに20日夕方宗城も同じ趣旨を陳情しようとしたと述べている。つまり、条約調印は承認し、継嗣についても仮りに南紀に決定しようとも、幕政改革が行われるならば是とする見解のように見える。慶永の答書は「養君之事ハ多分延ひ可申、京鴻未着」として、継嗣は勅諭によって決定すると考えている。春山が直弼から得た情報も同様であった。一橋派はいまだ慶喜擁立の可能性を捨てていない。

6月21日付宗城宛豊信書翰では、⁷⁶⁾ 三条実萬から書状が届いたとして、「於朝廷年長云々御評議も御坐候 赴^(ママ)ニ聞へ、左候時ハ一日も早く桐奸（○松平忠固、前名忠優、23日老中免職）落職ニ至候ハ、紀亦橋ニ変可申候」と述べ、慶永、忠震も同意見と伝えている。

翌22日、惣出仕の上条約調印が公表された。この件は武家伝奏広橋大納言光成・萬里小路大納言正房（関白は九条尚忠）に幕閣から正式に通達された。⁷⁷⁾ 同日、直弼は宗城に書翰を送り、「案外之御紙面ニ預り、汗顔之至り候」とあり、継嗣問題の遅れを宗城が批判していることが分かる。6月9日付慶永宛斉彬書翰では、⁷⁸⁾ 「遠州（○宗城）説破有之候へ共、難行届事と奉存候」と、宗城の大老工作は失敗すると見通している。さらに「条約ハ御取極之上、西ハ紀ニ御治定之由、両 違約相成」との見解を示している。斉彬は西郷隆盛の正確な情報分析に立っているのである。

6月24日、諸大名の非難を背景に、徳川斉昭・慶篤父子、徳川慶恕（慶勝）

らの御三家大名が不時登城して井伊大老の違約調印を責め、翌25日、幕府は紀州藩主徳川慶福を將軍家定の継嗣に定めた(家定は7月6日没)。このことは周知の通りである。この日夕方、宗城は慶永を訪ね、この日登城しなかった慶永に明日は登城しなければ、「事の体御不平に当り、幕府へ被対候而も御失敬なるへきなれハ」として忠告している。⁷⁹⁾ 6月22日付宗城宛直弼書翰では、⁸⁰⁾「丹波義転役目出度存候」と宗城の兄直信の昇進(勘定奉行)を喜び、なお精忠を尽くすより伝言を求めている。同日、直弼はさらに宗城に宛て、老中松平忠固、堀田正睦の老中罷免を知らせている。⁸¹⁾ この辺に宗城・春山の政治的立場が表現されていて、一橋派、南紀派の中間に立って、双方の情報流通のパイプになっていたことが分かる。慶永書翰のこの時点での多くは、このことを裏付けている。慶福の擁立について、慶永が6月24日宗城に「御便之儀、早々井伊氏被参候趣ニ御サ候」と述べている一事でも分かる。⁸²⁾ 幕閣の狙いは慶永、豊信らにあり、宗城は慶永らのように強硬な姿勢を示すことはなかった。

6月24日付「先公(○春山)御書」のなかで、⁸³⁾ 条約調印について外圧の前に「一向此处ニてハ渡来致候方可宜候」と是認し、継嗣について勅諭が到着したかどうか尋ねている。春山の情報源は直弼である。25日付春山宛直弼書翰では、⁸⁴⁾ 水戸藩父子・慶恕・慶永の不時登城と発言を抑えたと知らせ、継嗣についても不都合があるとして御三家(水戸・尾張)の反論があったが、これは発表済みとしていたことを告げている。斉昭ら3人は大老の退官を求めているとして、「只今乍憚小子退き候而ハ如何相成可申哉」と、春山・宗城の了解を求めている。26日には養君確定の祝いとして諸大名の惣出仕があった。

この26日、堀田正睦退任の後をうけてのことであろうか。『紀事』によると、⁸⁵⁾ 平山謙次郎(敬忠、図書頭、岩瀬忠震配下の一橋派)が橋本左内に、岩瀬の献策として、大老は「海外の事情に疎し、露国条約を初外国の事務遷延壅滞して、殆大事を誤らんとする勢なる故、別に海防の一局を開らき、宇和島侯を薦めて其局の総裁となす事を謀らんとす」と、海防掛が宗城を外国事務総裁に就任することを勧めた。この案には慶喜を將軍の参謀とする件も含まれているが、慶

永も同意した⁸⁶⁾しかし、『紀事』は宗城の意見として、外国事務局に海防掛の官僚を集めた一局を作り、これに総裁1人を置き、「外国事務ハ応接其外一切此局へ御委任」する案を持ち、総裁には慶永か斉彬を推すと幕閣に進言している。外国事務には長崎・箱館等の庶政、練兵・海軍の操練、蕃書調所も付属すると、宗城は陳述している。幕府は7月8日、外国奉行を設置した⁸⁷⁾

注

- 1) 「藍山公記」巻94 3丁
- 2) 同 13～16丁
- 3) 同 巻96 33・36丁
- 4) 同 51～53丁
- 5) 石井孝『日本開国史』254ページ～
- 6) 『昨夢紀事』第6巻 98ページ～
- 7) 「公記」巻94 24～37丁
- 8) 同 38～巻95に続く。
- 9) 同 巻96 11～17丁
- 10) 同 17～18丁
- 11) 同 41～43丁
- 12) 同 43～巻97の6丁
- 13) 同 巻97 6～20丁
- 14) 同 20～32丁 この間の事情『昨夢紀事』参照。
- 15) 同 巻99 5～58丁参照。
- 16) 石井孝『日本開国史』291ページ～
- 17) 「公記」巻94 54～60丁
- 18) 同 巻95 8～13丁
- 19) 同 巻99 5～14丁
- 20) 同 15～16丁
- 21) 同 21～24丁
- 22) 『昨夢紀事』参考のこと。
- 23) 「藍山公記」巻99 25～58丁
- 24) 同 巻100 2～3丁
- 25) 同 4～7丁
- 26) 同 7～10丁

- 27) 『昨夢紀事』 参照のこと。
- 28) 「藍山公記」 卷100 11～42丁参照。
- 29) 同 39丁～
- 30) 『昨夢紀事』 11 328ページ。句読点・常用漢字は筆者。
- 31) 「公記」 卷102 3～6丁（4月3日付）
- 32) 同 12～19丁（4月19日付）『紀事』の引用。
- 33) 同 24丁
- 34) 同 47丁
- 35) 同 53丁 『昨夢紀事』を引用。
- 36) 『昨夢紀事』 11 391ページ～
- 37) 「公記」 卷103 18丁 『紀事』を引用。
- 38) 「御書翰類」 第4巻 14丁
- 39) 同 第4巻 15丁
- 40) 『昨夢紀事』 卷11 401ページ～
- 41) 「公記」 卷103 41丁
- 42) 『紀事』 卷11 402ページ。4月29日朝、春山は直弼に会う。
- 43) 「公記」 卷103 43丁
- 44) 「公記」 卷104 1～2丁。5月1日堀江南平没。
- 45) 同 5～10丁 『紀事』を引用。
- 46) 同 11～ 同上
- 47) 同 17丁
- 48) 河内八郎『徳川斉昭・伊達宗城往復書簡集』 358ページ
- 49) 同 360ページ
- 50) 「公記」 卷104 27丁 『紀事』を引用。安政5年5月21日、斉昭宛「時勢急務策」草案参照のこと。
- 51) 『昨夢紀事』 卷12 45ページ。「公記」 卷105 3丁参照。
- 52) 『徳川慶喜公伝』 史料編1 195ページ
- 53) 『紀事』 卷12 49ページ 「公記」 卷105 参照
- 54) 同 50ページ 同上
- 55) 「公記」 卷106 2丁
- 56) 同 13丁に引用。5月21日。面会は謝絶された。
- 57) 同 15丁
- 58) 同 19丁 『紀事』 参照。
- 59) 同 20丁
- 60) 同 23丁

- 61) 「公記」巻106 29丁 『紀事』引用。
- 62) 同 32丁～39丁。27日の記事に藩の歩兵調練を近來西洋風に改めたとあり。
- 63) 「御書翰類」第4巻
- 64) 同 上
- 65) 同 上
- 66) 『紀事』13 112ページ
- 67) 同 159ページ
- 68) 同 160ページ
- 69) 同 162ページ 「公記」巻107 48丁
- 70) 「公記」巻108 12～14丁
- 71) 「御書翰類」第4巻
- 72) 同 上
- 73) 「公記」巻108 34丁 「岩瀬肥州に呈書」
- 74) 同 39丁 『昨夢紀事』引用。
- 75) 同 45丁～48丁 『紀事』引用
- 76) 同 巻109 1～5丁 同上
- 77) 同 20丁～23丁
- 78) 同 24～27丁 同上
- 79) 『紀事』巻14 286ページ
- 80) 「御書翰類」巻5
- 81) 同 上
- 82) 同 上
- 83) 「公記」巻110 2～3丁
- 84) 同 29～31丁
- 85) 『紀事』第14 294ページ
- 86) 同 306ページ
- 87) 「公記」巻110 『紀事』巻15 309ページ 7月朔日条